

博士 (人間科学) 学位論文 概要書

感情・感覚・行動領域に及ぼす
否定形暗示文の作用過程

1998年 1月

早稲田大学大学院人間科学研究科

宮下敏恵

指導教授 門前 進



序論

本章においては、肯定文とは異なる否定文がなぜ用いられるのか、という問題提起をおこなった。

第1章 否定の概念および定義

本章においては、様々な領域における否定の定義を検討した。

第2章 否定の内容に関する研究

幼児の発話の研究からみた否定の内容に関する研究の概観をおこなった。

第3章 否定の構造的特徴に関する研究

否定の構造的特徴について、否定文の認知の側面と様々な領域における否定文の影響の側面からの研究の概観を行った。

第4章 “打ち消し” “ない” という意図的操作の困難性

“打ち消し” “ない” という意図的操作の困難性について、門前(1988)の研究を中心に研究の概観を行った。

第5章 本研究の目的

本研究の目的としては、肯定形暗示文とは異なる否定形暗示文の伝わり方を検討する上で、意図的操作を行う内容の要因を調べることにした。そして、否定形暗示文の作用に影響を及ぼす要因について、さらに検討を行うことを目的とした。

第6章 感情・感覚・行動領域における否定形暗示文の影響

本章においては、知的に打ち消すという意図的操作を行う内容の違いによって、否定形暗示文の作用が異なるのではないかということについて検討を行った。意図的操作を行う内容の種類としては、感情、感覚、行動感覚、行動をとりあげ実験を行った。その結果、否定形暗示文が否定として作用する領域、否定形暗示文が肯定として影響を及ぼす領域、否定形暗示文が否定・肯定両方の影響を及ぼしているのではないかと考えられる3つの領域の存在が示唆された。

第7章 否定形暗示文が否定・肯定両方の影響を及ぼす領域の特性

本章においては、否定形暗示文が否定・肯定両方の影響を及ぼすのではないかと考えられる領域の特性について検討を行った。その結果、微細な心理面を

あらわしているのではないかと考えられる水準において、否定形暗示文が肯定として影響を及ぼしているという特徴がみられた。

第8章 打ち消し”ない”という否定語の数に関する要因の検討

本章においては、否定形暗示文が否定として作用する領域の特徴をさらに明確にするために、否定語の数に関する要因の特性について検討を行った。その結果、否定語の数2である二重否定形暗示文において、最も肯定形暗示文との反応の違いが顕著にみられたのである。微視的水準の行動としては、肯定形暗示文による反応とは異なる影響がみられたのである。また、否定形暗示文には、目標達成に注意が集中するという特性と、正確さを追求する特性の2つの特性が存在するのではないかとという結果がみられた。

第9章 2者の関係性と性格要因の検討

本章においては、否定形暗示文の作用に影響を及ぼす要因として、2者関係の要因と性格要因の検討を行った。その結果、否定形暗示文の受け手における性格要因の影響が大きいという結果がみられたのである。その中でも、思考的に外向的で、支配性の高い性格及び、非活動的、非衝動的、社会的に内向的で、服従的な性格という2つの性格の影響が大きいという結果が得られた。

第10章 臨床場面における否定形暗示文の特性

臨床場面におけるクライアントの否定文について、事例を通して検討を行った。その結果、クライアントの否定文の言葉には、当然するべきであるという肯定の考えが存在していることが明らかになったのである。臨床場面において、否定文に注目することで、クライアントの当然と考えている価値観が明確になり、クライアントの特徴が見だしやすいのではないかと考えられる。

第11章 総合考察

否定形暗示文の作用から、感情・感覚・行動領域における構造として、3つの領域の存在が示唆された。また、意図的操作が行えるか、枠があるかなどの観点で分類される、否定形暗示文の作用過程のモデルが見いだされたのである。